ADULT ONLY
Only if...!
JOKER TYPE · Aoi Nishimata

Shiori Misaka
Kanon
Only if...
Hiro Suzuhira

Only if...

Aoi Nishimata
&
Hiro Suzuhira

2000 JOKERTYPE & HEAVEN WORK

Kanon

adult only

Zenki

illustration by Hiro Suzuhira

2000 JOKERTYPE & HEIGHT♥MARK

Message Pad

Aoi Nishimoto / Hiro Suzuhiro

どうもですー。西文ですー。やっとのkanon本ですがヤバイですo.o
トホホー…。時間なくてザッとしたトレーンがになってまって…。
ラララ——…。ピンナップも描けなくて… うー…ごめんですo.o.o
表紙も季節がずれ——。冬にしておけば…。…トホホ…。
もうどうにかして—。手も痛い—…ラララ…。対談じゃヤイ
前.後記で初じゃん?? そのくらい時間ヤイの!! ヤバイのう——!!
小説手あいてくれた あごバリアくんも アシの4人さんもありがとう—。
来るよ——メッカガー。もうヤバイー。おこられる—。ヒーヒーヒー。
とりあえずものすごくがんばったので見てやって下さい.

どうも——…鈴平へっぽこひろで——す…。
西文には申し訳ない出来になってしまいましたが…もう本当に
ヤバイのでゆるして下さい。ゴメンナサイ。あと前に告。
ポイやっ描いたのとは全然カンケー無いので…。
あくまと私だけピンナップ入ってんのは裏表紙のCG
原画取り込みサイズ間違えて、超小ちゃい絵を無理に
ひろのばしたらジャギってて あまりにもヒサンだったので
そのフォローをさせてもらったからです。西文Fanの方々
スミマセンです——…はぁもう本ト時間ヤバイ…

Pad Message

Mokuji

Only if...
kanon

illustration by Aoi Nishimata

実録4こま
47

Information
45

名雪-NAYUKI-
31-42 comic

illustration
03@23@27@49

Cover illustration

たとえばこんな月の下
Novel
19-30 あごバリア

assistant
comment
43-44

奥付
50

enquete
51-52

Back Cover illustration

illustration
04@21@29

栞-SHIORI-
7-18 comic

Information
46

illustration by Hiro Suzuhira

これは 夢……
それとも 幻……？

~IRIS~ 華

んぅ…
はぁ…
祐一さん…
あ
ぷるぷる
ぷるぷる
ぷるぷる…
まだ慣れない？
まだ…
はい… まだ… 恥かしい… です
もじもじ
もじもじ
09

ごめ ちょっと だけ ガマン してくれ…
あい
ペロッ
あ あ…
ピクン…ッ
ひっ
あ あ…っ
ペチャッ
ちゃぷ
ぷ
ぷ あっ
ぷ あ あっ
ちゃ あ あ あ あ
ぴくり…
な…何だよ？ そんなに イヤなのか…？？
だって…汚いぞ

そんな事 ないって！
栗の方ったら
オレは気にしない…っ

そんな違います…っ

じゃあ 栗は オレのを
汚いって思ってる？

えっ

そんな…っ

思ってないです…
絶対…っ

可愛いーー…

じゃあさ…

!!

何か……
これって
ズルイです……っ

むっ…。

まあ
まあ…っ

まだっ

ラチ…
……っ

すごい味…ッ…

ボタボタッ

ゲッ

ごっ、ごめんな？

…いえ…

でも、一言、今度からは言って下さいよ…

ギュ…

じゃあ、今度こそガマンしてろよ…？

……？

ぐいっ

あっ

ぴくんっ

あっ…
ビクッ
ちゅぱっ
しゅぱっ
ぬぬぬ…
あぁ
あっ
あ!
やっぱり
やっぱ
ぺろぺろ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ハァ
ハァ
ハァ
葉…
そろそろ
いいよな…?
はい…

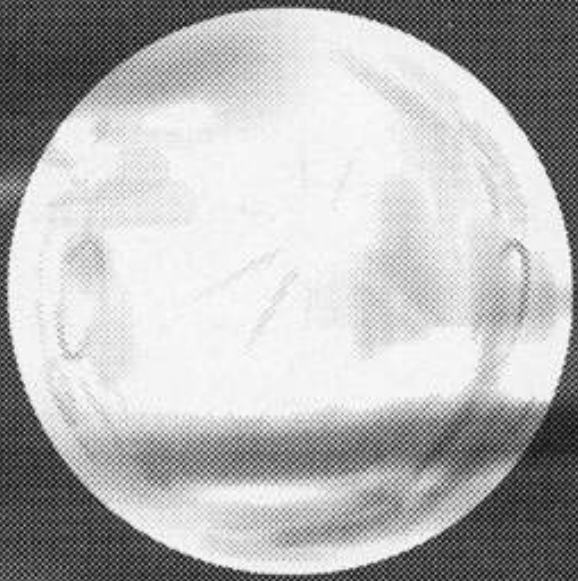
ぎちっ ぎゅっ
ぎゅっ
あんっ
ぎゅっ
じゅぷ
じゅぷ
じゅぷ
じゅぷ
ジョポッ
あぁ…っ
ぎゅっ
あっ…
むにゅ
んっんーっ
ぎゅっ
ぎゅっ

あっ
いっいやあっ…ん
あっ
ずぶっ
じゅぷっ
じゅっ
じゅ
はあ
あっ
はあっ
い……っ
ぷちゅっ
ちゅ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
やっあっ
ズチュッ
あっ…っ
栞…っ
ズチュッ
あっあっ
ん
ちゅ
ぷ
クチュッ
はあっ
いっちゃう
16

ふあああああっっ
びくびく……っ!
あたたかい…

さめないのなら『夢』でも　いいです…よね？

FIN



たとえばこんな月の下

あごバリア

たとえばこんな月の下

あごバリア

「祐一―、祐一―」
ドンドンと窓を叩く音がする。ベッドの上から起き上がりカーテンを開くと、そこには予想通りの人物がいた。
「どうした名雪？」
言いながら窓を開ける。少し涼しげな風が入ってくるが、冬の突き刺すような風とは違う。春らしい気持ちの良い風。
「ほら、月が凄く綺麗だよ」
「はあ、月？」
にこやかに空を指差す名雪につられ、祐一もつい空を見る。
それは確かに美しかった。
満月に限りなく近い月。
雲に邪魔される事もなく、ただ静かに銀の光を放っている。
「ね、綺麗でしょ」
「…ああ、確かに綺麗だな」
祐一の言葉は肯定していた。だが口調が否定している。
「祐一、どうかした？」
「いや、こういう綺麗な月はあまり好きじゃないんだ」
「綺麗な月が好きじゃないって、それって何か変だよ？」
「いや、子供の頃お袋に聞かされた事があってな。『月の光には魔性が潜んでる。綺麗な月には特に気を付けろ』ってな」
「それって、夜更かしする子供を寝かせる為の御伽噺じゃないの？」
「それは分かってるんだが、実際あまりいい思い出がないんだよな」
それは事実だった。
階段から落ちたのも、酔った父親にいきなり殴られたのも、自転車で車に轢かれかけたのも、みんなこんな綺麗な月の夜だった。
いま思えば、七年前この街を去った夜も、こんな綺麗な月が出ていたような気がする。
「ふうん。じゃあ今夜はそんな事のないように、いい事教えてあげるよ」
「いい事？」
「そう。明日ね、祐一がきっと喜ぶような事があるよ」
祐一は静かにその言葉の続きを待った。だが一向に続きが始まる気配がない。まさかとは思うが。だが名雪の事だ。意を決して聞いてみる。
「…いい事ってそれか？」
「うん」
「必殺チョオップ！」

HIRO.S

ゲシッ
「…痛いよ、祐一」
「頼むから痛いならもうちょっと痛いという感情表現をしてくれ。大体、今お前が言ったのはいい事なんかじゃなかろうが。単にもったいぶらせただけだ」
「そうかな？」
「もういい。俺は嫌な事が起こる前に寝る」
そしてとっとと窓を閉める。その勢いで閉めたカーテンの向こうから、
「うん、オヤスミ」
いつもと変わらぬのんびりとした声が聞こえた。

翌日。
その日は朝から何かが違った。
何かソワソワとしている知人達。
隠し事でもあるかのように、コソコソしている同級生。
そして、授業が終った瞬間ドタドタと走り去った同居人。
追いかけて問い詰めようとも思ったのだが、自分はなぜか公園にいたりする。
こうしていてもラチがあかない。祐一は左を向くと、そこにいる人物に問い掛ける。
「あのー、佐祐理さん？」
「なんですか祐一くん」
「自分はなんでこんな所にいるんでしょうか？」
「あははー、自然の中で和みたかったんじゃないんですかー」
「さいですか…」
乾いた笑顔を浮かべながら、祐一は正面に向き直った。
中央の噴水から吹き出る水が、陽光に反射して輝いている。
小さく深呼吸を一回。
ならばとばかりに今度は右を向く。
「おーい舞」
「しらない」
「とりつくしますらくれんのかい…」
完全なる敗北であった。
もはや逆らう権利もない。ただ無常に時の流れに身を任す。
鳥の囀り。噴水の水の流れ。木々のざわめき。いくつもの音の中に身を任せ、ただ静かにボーッとしている。
穏やかな日常。たまにはこんなのもいいかもしれない。
無数の音が混ざり合い、ぶつかり合い、アピールし合い、そうして一つの世界を作り上げる。
全速力で走り続ける事しか知らなかった祐一にとって、それは確かに安らぎだった。
左右を見れば、舞も佐祐理さんもすでに夢の中にいる。

私服姿の二人が実に新鮮だ。まあ、この春に高校を無事卒業したハズの二人が制服姿だったりしたらかえって変だが。
「たまにはのんびりするか…」
静かに目を閉じ、自然の中にその身を溶け込ませる。大きく息を吸い込み、
「おまたせー！」
激しいタックルによるクリティカルを、その鳩尾にくらった。
視界が一瞬暗くなる。白と黒とが反転し、呼吸すらもが停止した。かろうじて体内に残った酸素を掻き集めると、その一言の為にすべてを費やす。
「俺を殺すつもりかあ、あゆ！」
「うぐぅ、殺すなんてひどいよ。ボクそんなつもり、ぜんぜんないもん」
「だったらせめて急所へピンポイントなタックルをやめろ…！」
荒いながらも呼吸をしつつ、とりあえず身体機能の回復をはかる。そんな祐一の惨状にも、左右の少女は慣れたものか焦りもしない。ゆっくりと伸びをすると、まるで何もなかったかのようにあゆへと声を掛ける。
「準備できましたか？」
「うん。もうオッケーだよ」
「では祐一くん、行きますよ」
「……行く」
スックと二人の少女が立ち上がった。祐一の両腕をガッチリと抱え、そのままズルズルと引きずっていく。
「はい？」
一体自分に何が起こっているのか。祐一はそれすらも理解できず、ただただ連行されるのみ。
（明日ね、祐一がきっと喜ぶような事があるよ）
昨夜の名雪の言葉が思い出される。
「なんか、限りなく嫌な予感がするんだが…」
それは、予感というよりは予知に近かったのかもしれない……。

最初にクラッカーを鳴らしたのは名雪だった。
パアンッという小気味よい音が響き、すかさずみんなが後に続く。
「祐一、誕生日おめでとう～」
水瀬家。リビング。豪勢な料理。そして祝福してくれる友人達。なるほど、今日はいわゆる誕生日というものらしい。その準備の為に、みんなソワソワしていたようだ。
それは分かった。
だがどうしても分からない。
「誕生日って、誰の？」

時間が止まる。
静まり返った部屋の中、舞がスルリと剣を抜いた。その輝きからして間違い無く本物だ。そのまま祐一へと刃先を向けると、一気に踏み込む。
「ちょ、ちょっと待てぇ！　ほんとに知らないんだよ！　知らないんだからしょうがないだろう！」
刃は寸前でピタリと止まった。寿命の二・三年は確実に縮んだろう。
「祐一、自分の誕生日知らないの？」
「…はい？」
名雪の言葉に祐一は首を捻る。昨年、一昨年、と一年ずつ記憶を辿っていけば、八年ほど前に確かに祝ってもらった記憶があった。
「誕生日なんかここ数年無視してたからなあ、すっかり忘れてた」
みんなの視線が痛い。あの、佐祐理さんの笑顔にすら痛みを感じるあたりが特に。
「とりあえず覚悟はいいな？」
ポンッと北川が肩を叩いた。その時の邪悪な笑みを、祐一は一生忘れないだろう。
「それじゃあ、気を取りなおして」
名雪が再び進行を始める。
「祐一、誕生日おめでとう～」
なかば無理やり狂乱の宴は始まった。
それ以後、祐一の記憶は断片的にしかない
それらをなんとか集めてみると次のようになる。
まずは北川が潰れた。いや、潰した。
あまりに女性陣（特に佐祐理さんと舞）を紹介しろとうるさいので、とあるジャムサンドを食わせたら静かになった。
真琴とあゆはとにかく食った。
食って食って食い続け、やはり、とあるジャムご飯（名雪特製）に手を出したら眠りについた。それが永遠でないことを祈る。
やがて香里が危険物を持ち出す。
名雪の部屋にあったハズの某目覚まし。
さすがに恥ずかしかったのか、慌てて名雪が止めに入り、気付いたら何故かウイスキーのボトルが空になっていた。
どうも二人で空けたようだ。横でバッタリと倒れたまま動かない。顔が少々青ざめているのは実は内緒だ。
栞と美汐と佐祐理さんは、どうやら甘い物好きで意気投合したらしい。水瀬家の冷凍庫に入りきらない程のアイスの容器を積み重ね、いつの間にやら寝入っていた。
秋子さんは早速片付けモードに入っており、かろうじて祐一だけが起きている。というよりも、気が付いたら起きていた。

「えーと…」
自分は一体何をしていたのか。今一つはっきりしない。まるで頭の中全体に霧がかかったようだ。
とりあえず目を覚まそう。洗面所に移動すると顔を洗い、そのまま軽く体を動かす。
多少は霧が晴れたらしい。なんとなくスッキリとする。
意識がはっきりし始めたところでリビングへと戻り、そこで突然思い出した。
「舞はどこいった？」
ウイスキーをストレートであおる名雪と香里。
そんな二人に対抗するかのように祐一は日本酒を持ち出し、舞と二人で飲み合ったのである。
一度思い出してさえしまえば、記憶というものはやたらと鮮明になるものだ。
確か二人で一升瓶を二・三本空けたハズである。いくら舞とはいえさすがに多すぎた気がしなくもない。
慌てて家中探し回ってみたが、どこにも舞の姿は見つからなかった。

昨夜に勝るとも劣らない、そんな綺麗な月の夜。
月が真円を描いている——満月である分だけ、昨日よりも上かもしれない。
やはりそんな月夜を気にしているのか、祐一は少し早足気味で夜道を進む。
「舞の奴、一体何がしたいんだ？」
呟きながら、ポケットから小さなメモを取り出した。秋子さんが舞から預かっていたメモだ。
『学校で待ってる』
そこには一言、それだけが書いてある。
魔物はもはや存在しない。もはや夜の校舎に忍び込む必要もない。実際、こんな時間に学校に行くなど、あの冬の日以来だった。
やがて校舎が見えてくる。人の気配など微塵も感じない。本当にこんな所に舞が来ているのか。そんな疑問も湧いてくるが、舞のことである。待ってると言ったからには必ず待ってるだろう。
校門にはいない事を確認して、そのまま校舎へと入っていく。
中はあくまで静寂の空間だった。物音一つする事なく、全ての存在があやふやに感じる、そんな空間。
なんとなく懐かしさを覚えつつも、祐一は奥へと向かって歩き出す。
舞のことだ、待ってるといったらどうせあそこだろう。
舞と佐祐理さん、そして祐一。三人が毎日のように出会っていたあの場所。シートを広げ、三人で大騒ぎをしなが

Aoi Nishimata

ら弁当を取り合ったあの場所。
屋上へと続く階段。最上階への扉の直前にある、その踊り場にやはり舞はいた。
「舞、なに制服なんか着てんだ？　とっくに卒業しただろ」
「…学校に来る時は制服だから」
「そりゃ在校生の話だろ」
「でも規則」
「こんな時間に校舎に侵入してる時点で、既に規則もないと思うが…って、まさかお前、わざわざ着替えて来る為に一度帰ったのか」
コクンと頷く舞を見て、祐一は嘆息する。
もっとも、どちらかといえば安堵の溜息ではあるが。舞が、舞のまま変わっていない事に対する。
「で、こんな場所に呼び出して、一体どういうつもりだ？」
「…月…」
「え？」
舞の視線が窓へと移る。それにつられるようにして、祐一も窓の外を見る。
そこからも月が見える。どうも昨日の夜以来、自分は月に魅入られてるようだ。
空から放たれる光は静かで、冷たくて。けれど同時に何か優しくて。
（まるでどこかの誰かみたいだな）
自然と笑みが浮かんでくる。
「なあ、舞…」
窓の外を見ながら、祐一は隣の少女へと声を掛けた。
その瞬間、
スッと伸びた舞の手が、ガシッと祐一の襟を掴み、そのままグイッと引き倒す。
「うわあ！」
それはまったくの予想外。抵抗する間もなく祐一の体が宙を舞う。
ポフッ。
「ぼふっ？」
思わずそんな声があがる。
地面に激突した割には、あまりに似つかわしくない音だった。
しかも、その衝撃もほとんどない。
とりあえず、今の状況を良く考えて見る。
９０度横になった視界。
そして頭の下にある、暖かく柔らかな感触。
「え？」
まさかこれは……。
「ひざ…？」
そのまま顔を上へと向ければ、そこには舞の顔があった。
ひきしまった、端正な顔立ち。こうして間近に見てみる

HIRO

と、その綺麗さがより分かる。
一瞬目が合い、舞は慌てて上を向いた。
そして消え入りそうな声で。
「……おめでとう……」
それは精一杯の贈り物。
不器用な少女がくれた、心からのプレゼント。
上を向いたままのその顔が、はっきりと赤く染まっている。
以前にも膝枕をしてもらった事はある。だがあの時とは明らかに意味合いが違う。
「……舞」
祐一は顔をほころばせると、ゆっくりとその目を閉じた。
舞の手が、そっと祐一の頬に触れる。
その温もりが気持ち良いい。

夜空に浮かぶ真円の月。
銀の光が窓から差し込み、まるでスポットライトのように二人を照らす。
魔性が潜む月の光。
静かで冷たく優しい光。
どこかの誰かによく似た光。
そんな光に包まれながら、
「こんな月夜もいいもんだ」

祐一っ～～～…
ゆさ
祐一～～っ
ゆさ
ぐがー
う～～…
もう…
ぐいっ…
今日は、めずらしく一人で起きられたのと、今日は祐一が起きないんだもん～～っ
えっ?
……っ!!
どきんっ…
私がず――っと祐一に、片思いしてるのかな……

名雪～NAYUKI～
by：AOI NISHIMATA
ドキ
ドキ
や…寝ぼけてるのかな
祐一さん……？
名雪まだいるのかしら？
ラ…ラんっ……
55

ごめんね…母さん、祐一……ちょっとだけだから……
……キスだけ…
キスだけ、したいんだもん
……
祐……一……
ドキ
ドキ
ドキ

ムラ…
!?
ん…ふぅ…
すぅ…
ツツ…
あ…あ…
ゆ…祐一…私…
ドキ
ドキ
パッ!…
きゃあっ!!
名雪…
こっちに来りよ
いっ
ぼふっ

だ…
だめだよっ…
はずか…しいっ…
ピクッ
ラ…っん…
くちっ
ちゅぷっ
ひあっ…
あ…ふ…
はっ…
ん…
はっ…
入れるよ?
あ…ダメッ…
パスッ

あ……
ぐ…
ミチッ
ミチッ
ピピッ
あっ……
あぁぁ…
ひぁぁっ……
ぐっ…
ミュルル
ズプッ
あ……っ……
祐……っ……
あ……う
あ…あ…熱いよぉっ
ハァ
ハァ
ハァ
ズプッ

んくっ…
くるっ…
ぴくっ
プルン…
ぷるっ…
んっ…
ジュル…
グチュ…
あっ…
あっ…ぁ
スゴイよぉっ…
ひぁっ…
はぁふぅっ…ん
ぷ

あっ……あぁっ……
祐一っ……!!
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
んっ……
んぁ……
ぷるんっ
ぷるっ
ぁっぁ……
ん……んんっ……
ぁぁ……

名雪…オレ…
気持ち良すぎてっ……
あ…
あ
ズン
もう…
イキそう…だ……っ
ズン
クチャッ
ズリ
ああぁ
ズン
ふっ…あっ……

あ……ああっ……
ビッ
ビッ
ビッ
ビッ
ビクン
祐一……好きっ……
大好きいいいっ……
ビクンビクン
ビクン
ビクンッ
ビュルルッ
ビュルルッ
あんっ
あ……
あ……

名雪……
えっ？
ぽんっ
オレだって、ずっと昔から好きだったんだぞ……
あ……
……
カイッ
ラブッ
おいっ……名雪？
もそ
もそ
くるっ
……
祐一？私なんか7年間ずーーーっと
好きでいるんだよっ……
あの頃からの2人の思い出をまた、一から作っていこう？
ゆ……祐一っ♥
……だからゆ……
名雪……？
くるり
42
END

Message Pad

森です。

つかれた。
もっと『計画性』を
もってほしい!!

Assistant Comment

しりりです

にく好き
ぼくは大好き

Pad Message

Message Pad

☆えっと…今回、お手伝いさせていただいた、
AKIRAです。
まだ未熟ゆえ、みえちゃんとちーちゃんには
迷惑をかけっぱなしでした…。
もう少し精進せねば…。

☆最近、まったくゲームをプレイしていないので、ちょっとストレス溜まってます(笑)
この修羅場が終わったら たくさんプレイするぞ〜ッ!!
とりあえず、来年1月には、みえちゃんのゲーム「夏色剣術小町」が発売されるので、それまでには、いくつかクリアしておこうかなあ…。

それでは…みえちゃんとちーちゃん
そして、春ちん、あっきーくん、コースケくん、お疲れさまでしたッ

by AKIRA

Assistant Comment

各種デザイン・レイアウト&CG処理担当しました。
天野涼(あっきー? ほわいてぃー??)です。
突然、「Only if...」の作成に携わることになりました…
いやー大変な作業でしたー。肩が痛いです。
普段、あまりゲームをしないのですが。
Kanonは作品は珍しくクリアできました(笑)
即興で考えたので、イメージに近ければ幸いです。
せめて…もう少し時間があれば…

たれはんだのぐんべい(本体付)の箱を開けてない…
作業が終わったら、やりたいなー
責人なんで、皆さんに迷惑をかけてしまった
ような…ちゃんと印刷されるかな?
それだけが気がかりです。では、
機会がありましたら。それでは、また。

Message Pad

天野涼(ライブ行きたい)
(タカノリ断髪式希望!! 最近、Icemanに傾き気味)

●INFORMATON●

©HEART・WORK
1999 → 2000 BY・HIRO・S

●とりあえず年内にもう1冊。
仙人誌で「うたたねひろゆき先生本」
「A'-ALICE in…」
が出てるハズです。

●来年は何の本を出すのかなあ…?
あんまり決めてないんですが。
描きそーなのは春しゅあたりに
「ジュープリズム」とか「クロノ・クロス」
で使全本とかでしょーか…。
(「スクウェア本」て感じかも…)
でもその前に「ラルク本」…
すごい発行のびまくり…スミマセン

●お仕事はとりあえずパンゲー2本。
もう こんが いっぱい² で(自分には)
マンガ描きたいんですけどね——…
はれれ————…
何っ——かパンゲ——って
リラックスですね——…(泣)
初期の頃に描いた原画とか
全然、絵違うし…
いっそのこと全部描き直し
たい気分になりますね…本ト。
いっぱいトラブルもあったし…
胃に穴あきそ——ですね。
本ト。

●INFORMATION● 1999.12～2000.4 ©JOKER TYPE

♥次のJOKER TYPEの配本の方は 相川ルミちゃんとの「オリジナル本」になります――。
冬コミには委託でも直販でも出れないので 委託同人ショップONLYの取あつかいになります～。
月中旬に発行ですのでお楽しみに～！（虎の穴・メッセサオー・LLパレスetcに置いてもらう予定です）

♥お仕事の方は NECインターチャネルさんより 2000年1月下旬発売の「夏色剣術小町」の
キャラデザ・イメージ・イベントCGデザイン等をやらせてもらっています～。PSゲームです。ヨロシク！
あとは 新ブランドのパソコンソフトの原画を
やっています～。
1月発売のE-Login2月号に
広告がのるらしいです ヨロシク～

♥イベント参加の方は 2000年から
です～。受かれば 1月30日
のサンシャインクリエイションに
出ます――。よろしくです（ペコリ）

©JOKER TYPE / 西文葵

オリジナルです～。
一応メイド。メイドもえ～

99.Nov.N

実録マンガ by：西ヌミ

◦END◦ やっとナイので ハイだな…。ぁぁ―…チイターイ…。

あえ――… 終わ、…り…ます？ ああ 終わるようですが
今回本当にヤバイです。何せ対談するモノが無い程に!!
このシュラバ中に 3本 あったうちの 1本、パソゲーが
会社ごと消えたりして かなりブルー入ったりして大変!!
西又とやってたヤツです…あ――もう。でも 別のパソゲーで
やはり 2人で 原画 やってるから、そっち出りゃもーいいです。
もう1本は私1人で描いてて…もうずっと昔からやってるから
絵がなくて古くって泣けます。はー新年はラククと向える事
が出来るのが唯一何よりの救いですね。――…ちー

もー…仕事も大変でヤバすぎました。orororororor

2000 JOKERTYPE & HEART♥WORK

Only if...

HIRO SUZUHIRA

When there's shadow
you reach for the sun
When there is love then
you look for the one
And for the promises
there is the sky
And for the heavens
are those who can fly

If you really want to
You can hear me say
Only if you want to
Will you find way
If you really want to
You can seize the day
Only if you want to
Will you fly away

When there's a journey
you follow the star
When there's an ocean
you sail from afar
And for the broken heart
there is the sky
And for tomorrow
are those who can fly

Ah!je voudrais voler comme un oiseau d'aile
Ah!je voudrais voler comme un oiseau d'aile
(Ah!I would like to fly like a winged bird

©HEART WORK